

英語で行う授業において、不安を抑えて学習意欲を高める指導法の研究

－日本語での支援を活用した指導を通して－

長期研究員 佐藤 直美

I 研究の趣旨

高等学校学習指導要領において「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と示されたことにより、その取組みへの整備が急がれている。しかし、現勤務校では、コミュニケーション活動に対して消極的な生徒が多く、英語で授業を行うことに対して困難を伴うことも少なくない。そこで、このような現状を踏まえ、本研究では、まず「英語で行う授業」への転換が生徒の情意面に与える影響を調査することとした。その上で、教師が英語で授業を行いながら、生徒の不安感や意欲の変化に対応するために、日本語を「支援」として適切に活用することの有効性を、実践を通して検証していくこととした。

II 研究の概要

1 研究仮説

「英語で行う授業」において、生徒の理解の状況を把握するよう努めながら、効果的に日本語で支援する場面を設定した指導を行えば、生徒の不安は抑えられ、学習意欲を向上させることができるだろう。

2 研究の内容と実際

(1) 「英語で行う授業」に対する教員の意識調査

「英語で行う授業」を支えるための条件や支援内容を明らかにするため、県内の高校の英語教員50名にアンケートを実施した。その結果、およそ8割の教員が過去に「英語で行う授業」を試みながら、断念した経験があることが分かった。その理由としては、「英語で授業を行うことのイメージが持てないから」が最も多く、次いで「コミュニケーション活動が増えると生徒の不安感が増し、英語嫌いを増やす可能性があるから」が続いた。この結果から、教師は具体的な指導イメージや、生徒の不安感に対して、実施上の課題を抱えていることが明らかとなった。

(2) 英語の授業における生徒の不安要因の調査

研究協力校第2学年94名を対象に、「英語の授業中、どのような時に不安になりますか」と質問したところ、最も多かった回答は、「教師や級友とのコミュニケーション活動に対する不安」であった。これは教師が懸念する生徒の不安感に符合した結果であり、このような不安を軽減させるための支援や対策を講じることが、「英語で行う授業」を成立させる上では不可欠な条件であると考えた。

更に、教師が英語で授業をすることで生徒が英語に触れる機会が増える時、生徒の不安や意欲はどのように変化するかを調査するために検証授業を7月に5回実施した。対象クラスは2学年の文系クラス（1クラス）で、授業はPCPP（村野井2006 presentation / comprehension / practice / production）の流れで行い、5回の授業で教師の英語使用率を徐々に増やしていくことで検証を行った。

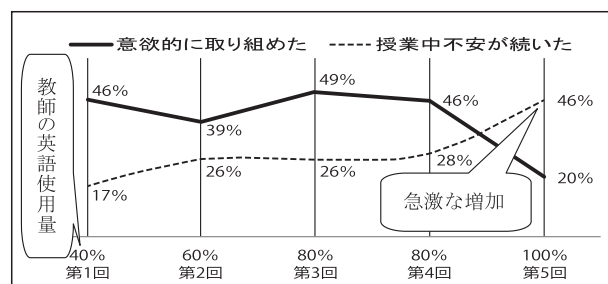


図1 教師の英語使用率と生徒の不安や意欲の変化

授業後のアンケートでは、教師の英語使用率が80%までの授業では、「授業中に不安が続いた」生徒の割合の増加は少なかったが、英語のみで行われた授業では急激に増加した。また、「意欲的に取り組めた」という回答が最も少なかったのも、やはり日本語を介さない、英語のみで行われた授業時であった（図1）。

以上のことから、英語だけで行う授業は、生徒の「不安感」を増し、それに伴い学習意欲を損なう可能性があることを確認できた。更に、たとえ補助的

であっても、日本語の活用が生徒の不安を抑え、意欲を向上させる上で、大きな援助となることを示唆する結果も得ることができた。

(3) 「英語で行う授業」において、日本語での支援場面を設定した検証授業の実施

調査から明らかになった生徒の不安要因を踏まえて、10月に日本語で効果的に支援する場面を設定した検証授業を7月と同一クラスで行った。授業の構成は同じくPCPPで行い、7月の調査で不安の増加が少なかった80%程度を教師の英語使用率の目安とし、下記の支援以外は可能な限り英語で行った。

① 日本語による支援1

新しいアクティビティの導入時や、初めての指示内容を伝える場面で、スムーズにコミュニケーション活動に参加できるように行う補助的な援助。

② 日本語による支援2

文法説明や文の解釈など、より具体的な説明が必要な場面での補助的な援助。

③ 日本語による支援3

教師が生徒の理解の状況を把握するため、適宜“Is it OK?”や“Is it clear?”と生徒に尋ね、生徒が“No.”などの意思表示をした時に与える補助的な援助。

(4) 授業後のアンケートからの考察

「どの支援が最も有効であったか」(複数回答可)の問いに対しては、支援1,2を有効だと支持した生徒はそれぞれ全体の3割に留まったが、支援3を有効だと回答した生徒は5割を超えた。支援3は、生徒の理解を確認しながら教師と生徒の双方向コミュニケーションの中で行われる支援であり、個々の生徒のニーズに合致し、最も実効性が高かったからだと推測できる。

また、感想の中には、「日本語だらけの授業よりも話を聞いて理解しようと思えた」など、「補助的な援助」としてのみ日本語を活用することで、ほどよい緊張感が維持され、そのことによって集中力が増したとする意見も多く見られた。

生徒の「不安感」を抑える効果も顕著に表れ、日本語での支援場面を設定して行った検証授業5回において、「授業中に不安が続いた」と回答した生徒

数の推移は5～8% (37人中2, 3人)に留まる結果となった。

更に、5回の授業を総括するアンケートで「日本語の支援によって学習意欲が増したか」について記述させたところ、「少しだけ日本語での説明があったおかげで、意欲的に取り組めた」「何度も意欲的になれた」など、37人中25人(68%)の生徒が学習意欲を増したと回答した。これらの生徒の姿からも、日本語での支援が効果的であったと判断することができる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

「英語で行う授業」において、次のことが大切であることが明らかとなった。

(1) コミュニケーションを通して生徒の理解を確認しながら、日本語での支援を行うこと

教師が一方向的に英語で説明するだけでなく、生徒とのやり取りを通して理解を確認し、生徒の反応を受けてから援助を行うことで、日本語の活用がより有効に働き、生徒の不安を抑え、学習意欲を向上させることが分かった。

(2) 生徒が英語に触れる機会を保障しながら援助を行うこと

生徒の実態に合わせて、生徒が英語に触れる機会をできるだけ多く保ち、日本語での支援は「補助的」にのみ活用することで、生徒の集中力は高められ、学習意欲を向上させる上で有効であることが分かった。

2 今後の課題

本研究においては、教師ができるだけ英語で授業を行い、「生徒が英語に触れる機会を増やすこと」により生徒の不安を抑え、学習意欲を向上させることは達成できた。しかし、「実際のコミュニケーションの場面とする」ことにおいては、不十分な面が見られた。今後は授業を生徒中心のコミュニケーション活動の場へ高めていく工夫を進めるとともに、それに伴う生徒の情意面への影響にも対応できるように、教師と生徒が共有できる重要なツールである「日本語」の、更なる有効活用法を考えていきたい。